

【子どもの観察例;マヤサ】 (女児 1971年2月6日生;4歳3ヶ月から7ヶ月間の記録)

・1975/05/22・・・マヤサは、ほんの2,3ヶ月前にドイツから移住してきたばかりで、英語はまるで喋れない。いかにもよそよそしく、強い緊張感が漲り、打解けない。だが、その顔つきからして明らかに賢そうで、鋭敏な理解力があるように窺われた。

ミルク・サークルの時間、子どもらが皆輪になっておやつをいただくとしている折に、彼女は突如として立ち上がり、けたたましく声を張り上げ笑い出す。止まらない。あまりに狂騒じみていた。ハリエッタが彼女をその場から連れ出し、気の静まるまで他の子らからは見えない廊下に彼女を置いてくる。それからしばらくすると、マヤサは落ち着いた様子で自分の椅子に戻ってきて座った。子どもらがゲームを愉しそうにしている間、彼女はじっと身体を強張らせて、他の子どもらの動きやら歌うのを眺めている。が、自分では加わろうとは一切しないまま。彼女の圧倒的なパフォーマンスに誰もが度肝を抜かれた。だが、不思議なことにどの子もこの異常な事態をスルー(無視)した。おそらく理解を超えていたからだろう。

・1975/06/12・・・最近のマヤサは、概して少し落ち着いてきたもようだ。彼女らしさが出てき始める。彼女の姉が学校からの帰途、ちょっとプレイグループに立ち寄ってくれた。マヤサは駆け寄って、彼女にひしと抱きついた。ひどく情熱的である。この熱情(パッション)が、時と所と相手次第では怖いかな？

・1975/09/11・・・彼女は依然として一人でいることが多い。彼女の遊び相手がなかなか見つからない。誰も一緒に遊ぼうと彼女を誘う子どもがいない。サイモンが滑り台の上に陣取っていたとき、マヤサは自分も同じようにしたいとふと思う。しかし彼に「おまえは、あっち行け！」と言われてしまう。マヤサは、それに対して「(滑り台は)あなたのものじゃないでしょ。皆のものよ・・・」と言い返す。確かに、彼女の言い分は「正論」なのだが。残念ながら、サイモンには何ら効果なし。彼女は、別段傷ついたふうではなかったが、それ以上敢えてサイモンに関わろうとはしないで、その場を歩み去ってしまう。「相手にすること・相手にされること」が妙にギスギスとした感じである。

[子ども同士お互いに遊び相手を「選んだり・選ばれたり」がある。どうもマヤサは「選ばれない」子どものようだ。何故だろう？言語が問題なのではない。英語はちゃんと喋れているのだから。だが他の子らに何かしら違和感を与えるものが彼女にはあるようだ。彼女の中に潜在する「過激さ」だろうか。自然他の子どもらが微妙に反応し、今一つ相容れないものとして彼女を斥けてしまう。つまり引いてしまうのだ。さて、今後彼女は誰を選び、そして誰に選ばれるやら・・・興味深い。]

・1975/09/18・・・まだ表情は固い。私の呼びかけにも応答しない。何ら声を発することはしない。彼女は砂箱で砂を篩(ふるい)に掛けて遊んでいたため、その傍らにいた私が、そのふるいから落ちてくる砂に手を出して、触ってみる。彼女はそれに明らかに反応し、ちょっと面白そうな顔をした。そして、続けて砂をふるいに振り掛けてゆく。言葉は発しないものの、私とのこうした交流にしばらく時を過ごした。

相手されていることが満更でもないという思いから、恐らく徐々に彼女の他の子どもらとの関係づけが始まる。相手することも相手されることも…。マヤサと遊んであげてねと誰か他の子どもに頼むほど、彼女は幼くないのだし…。いつまでも‘異邦人’でいられるはずもない。だが何かが彼女の中でフリーズしている。子どもらは誰も彼女には近寄らない。

机の上にあったドウ(練り粉)を丸めては、団子状のものを積み上げ、なにやらマヤサの顔に珍しくも嬉しげな表情が浮かぶ。……ジグソーパズルを一人でしていた。とても集中力はいい。いい結果ではある。しかしながら、私の言葉掛けにはなんら反応しないまま。感情は依然として強張っているようだ。

近頃、マヤサはハリエッタにはなついてきている様子だ。しばしば<ハリエッタ！>と呼んで、ハリエッタの注意を引こうとする動きが見られる。ハリエッタが、たった今マヤサの描き終えたばかりの絵について何か快活に話しかけている。彼女はそれに対して、<これ、私なのよ It's me！>と言う。自画像だということらしい。彼女の態度は珍しくもとても意欲的で自信に溢れていた。ここらでようやく、マヤサが‘イナイナイバー’ということならいいが…。

ミルク・サークルの時間、マヤサはダニエルのお隣の席に座っていた。いつかしら2人の間でお互いのからだのくすぐり合いっこを始めた。クスクスやらギャギャアやらの笑い声をたてながら…。マヤサは他の子どもが飲み物を取りにいった間、その空席にちゃっかり坐り、彼らをちょっと困らせるような悪戯をした。それから気持ちがリラックスしたのか、彼女はダニエルにキスをする真似っこをした。結構心を込めたふうな仕草であったのだが、ダニエルは何を思ったか、それに対して彼女に唾を吐くことで応戦した！それで<いけません！>とハリエッタに止められた。ダニエルはマヤサよりも6ヶ月年下の男の子。日頃このような不埒なことをする子どもではないはず。女の子にキスされるのにお返しに唾を吐くとは信じられない。ついちょっと前には彼らはくすぐり合いっこしてお互いに喜んでいたので尚更だ。マヤサの中に彼が反撥を感じる何が一体あったのか、気掛かりだ。とにもかくにも、マヤサにとってせつかくの「相手する・相手されること」のチャンスがこんなふうに台無しというのが残念。

マヤサが子どもらと一緒に折にドイツ語を発しているのを認めた。以前よりもずっと自分を誰かに伝えようという覇気が見られる。ミルク・サークルでは、彼女は皆と歌を歌うのに加わった。リズム運動にはまだ付いてゆけないみたいだが…。ハリエッタに自分の好きな歌を所望することすらもできた。そして自分もその歌を皆と一緒にとても嬉しげに歌った。これは彼女がこの国に来てから間もないことを思えば、実に素晴らしいと思われた。勿論彼女には年上の姉がいる。いろんな意味でそれが彼女に有利であるのは間違いない。今後イギリスに落ち着くのに知的な面での支障はなからうが…。

玄関口付近でマヤサは、庭を囲うレンガの塀に這いのぼった。ところがいざ降りようとするが、うまく降り方が分からない。そのまま怖さで体がフリーズしてしまう。しまいには泣き出した。そこで私が手を貸してやり、難なく地面に足を着けて一安心となる。……その後しばらくして、彼女の母親が迎えに現れた。

マヤサは自分の手を開いて引っ掻き傷を母親に見せ、＜犬に噛まれちゃったの・・＞と訴える。それもやや興奮ぎみに・・。母親は心配そうな顔つきになる。そこで私が、おそらくレンガの塀を上り降りする際にちょっと引っ掻いたんでしょと言うと、彼女はちょっと安心した顔をし、マヤサの‘作り話’を面白がった。[だが、これは無邪気な嘘ともいえない。その作り話には異様な‘過激さ’が混じっている。笑ってすませられる瑣末な出来事をなぜ恐怖に彩られた‘悪夢’にしなくてはならないのか。確かに塀の上では怖くて体がフリーズしたのだから、その瞬間は悪夢だったに違いない。だがマヤサはそれに更なる脚色を施した。事実母親は一瞬怯えたわけで・・。これじゃまるで‘愉快犯’にも近い心理とは言えまいか。それが妙にこちらの不安感を誘う。]

・1975/09/25・・マヤサは大きなお兄さんのお下がりの服を着ていた。ベストとズボンである。お転婆娘 tomboy といった感じだが、古着だからちょっとみすぼらしげではあった。そのお兄ちゃんのお下がりのせいも、自分もすっかりお兄ちゃんになったみたいなお気分になったのだろう、1歳ほど年下の男の子シルポーと一緒に、木切れを手にしながら追いかけてこを始めた。しかしそれもなんだかとても荒っぽくなる。どんどんエスカレートし、お互いの髪の毛を引っばるなど、なんだかむちゃくちゃになってゆくみたいなので、私が2人の間に割って入った。マヤサが木切れでシルポーにピシピシと殴りかかる。いかにも喜んで遊んでいるふうではあったけれども。やはりマヤサの過激さを案じて、私が先手を打ってマヤサから木切れを取り上げる。[どうやら2人とも互いに気が合ってるみたいなのだが・・。とても残念だ。せっかく互いに相手したり相手されたりしていても、遊びの愉しさが妙に損なわれてゆく。普通プレイグループで子ども同士、身体的に危害を加える、いわゆる乱暴することに抑制が利かなくなることは滅多にない。サッシャという男の子の場合例外的にかなり厄介な‘お邪魔虫’になることがあったが、彼はまだ他の子らに仲間として受け入れてもらっていた。だが、マヤサの場合は、どこかそんな生易しいものではなさそうだ。]

マヤサは依然として私とは隔たりがあり、私からの言葉掛けにも殆ど反応しない。どこかうちとけず、固苦しいものがあって、心の通じ合えるものが感じられない。それでムツリダンマリのままのマヤサでしかないかと思えば決してそうでもない。びっくりしたことがある。彼女が、たまたま来ていたルークの弟である赤ちゃんに接近を試みた。彼女はいかにも好奇心に溢れ、赤ちゃんのお相手に熱心であった。私が彼女に＜優しくするのよ＞と声を掛ける。赤子は母親の膝の上にあったのだが、彼女は敢えておかしな面相をこしらえて、彼を笑わせようと懸命となる。顔に触れるやら、足をくすぐったりもする。母親の方はむしろ無視してる具合だった。[こころもちょっと奇妙だが・・。]でもマヤサは赤ちゃんへの愛情を示すことにまるで臆せず、彼からの反応をなんとか引き出そうとする。実際に赤ちゃんは彼女にとっても活発に反応したともいえる。嬉しげに笑みをうかべ、彼女に興味を示していた。二人はそんなふうがいい関係をししばらく続けていたので、とても意外で驚いた。

ミルク・サークルの時間、アシスタントのジャッキーが、指人形を用意してきた。それにそれぞれの子どもの名前を訊いて回らせた。特にこの秋に新しくプレイグループに入って来た子どもらに対して・・。そしてどの子も、その指人形からの問いかけに喜んで元気に返事をした。自分の名前を名乗ることは、どの

子にとっても大いにプライドを感じさせるものらしい。ところが、その最中突如としてマヤサが立ち上がり、そのまま床にバタンと倒れた。この時点ですべての進行を事実上ストップさせた。倒れるとき、彼女は自分の身を庇おうとしなかったから、当然おでこを床にまともにぶつけた。この異常な事態に私が慌てて彼女を抱き起こすと、彼女はまったくの無表情である。すぐさまハリエッタが彼女を両腕に抱えた。そしてしばらくすると、なんとマヤサはハリエッタの膝の上に坐り、いかにも勝ち誇った笑みを浮かべていた。〔まるで‘自作自演’というか、皆の注目を引くために敢えてそんなことをしたのかと訝しく思った。実際のところ、彼女は指人形から彼女の名前をまだ尋ねられてはいなかった。自分の順番を待ちきれず、それで焦れたというわけか。確かに彼女の思いきった行動で、ついに自分が注目される番がやってきたという点では成功であったわけだが。ちょっと過激！それとも皆に喜ばれる人気者の‘指人形さん’に嫉妬でもしたのかな？いろいろな感情が彼女の中で渦を巻いている。何が何だか、真相は藪の中。〕

・1975/10/02・・・マヤサの英語の会話力が随分と進んでいる。そして遊戯のほうもそこそこ活発になり、物事を記憶することにも鋭敏であることが知られた。彼女は、私の名前「チズコ」を覚えることのできた数少ない子どもの一人である。

庭先で、マヤサはルークとダニエル、それにアランと一緒にいる。ミズ(earth worm)を見つけた。ダニエルがそれに枯葉を覆いかぶせる。アランが<踏み潰してしまえよ・・・>とニタニタ笑いで言う。ダニエルとルークが<そんなの、ひどいよ>と反論する。<ミズは冷たい血なの。人間はあたたかい血だから、違うんだよ>とルークが言う。マヤサはルークに味方している。

マヤサは、スライド・ハウス付属の滑り台で遊んだりしている。どうも見ても、危なっかしい。まるで何ごとか危険な目に遭って、近くにいるハリエッタの注意を喚起せんと図っているかのような奇妙な印象を受けた。つまり‘自傷行為’が危惧された。実際、彼女は一度床に倒れた。それで私が駆けつけ、彼女を起こしてどこか頭に怪我はないか見ようとすると、彼女は言葉を発せず、何ら表情のない目つきで、ただポオと突っ立ったままだ。こちらの心配しているという思いが、どうも彼女には届かない。

マヤサは女の子フェイと一緒に庭にいた。2人はお喋りしている。どっちが誘ったかは知らない。彼女らのうちの一人が、<赤ちゃんを連れてきなさいよ>と言っているのが漏れ聞えた。おそらくフェイだろう。どうやら2人で一緒に‘お家づくり’をしようということらしい。彼女らは庭の樹木の下に自分たちの‘住まい’を確保した。手近なところでボールやらビーンバック(クッション)などあれこれを集めてきて、自分たちの‘住まい’の中にそれらを保管した。どっちがママでパパなのか決めようとして話し合っていたようだが、しかしながら、これ以上2人の中で協調した遊びが進展することはなかった。尻すぼまりである。〔フェイは気がやさしいところがあり、マヤサよりも6ヶ月年下であるから、マヤサに対してイニシアチブを取るのは無理だろうし、またマヤサにとって他の女の子が喜んで夢中になる遊びが今ひとつピンとこないだろう。もしかしたら、女の子っぽいフェイが男の子っぽいマヤサにちょっと惹かれたということもありうるが・・・。いずれにしても、マヤサが女の子とつるんで遊ぶということは極めて珍しい。おそらく初めてだろう。〕

・1975/10/10・ミルクサークルの時間、マヤサはまるで赤ん坊みたいに執拗に指しゃぶりをしていた。ほんの数分の間ではあったが。。

・1975/10/17・マヤサは、どちらかという男の子らのちょっと乱暴な遊びにしばしば自分から加わる。ダニエルそしてルークと一緒に、マヤサはふざけ合っていた。そのうちだんだん乱暴が際立つ。互いに蹴ったり殴ったり、髪の毛を引っぱったりしてる。ついには、マヤサは床にからだを押し潰されそうな具合に2人の男の子らに押さえ込まれてしまう。ルークは5ヶ月年上だし、喧嘩してマヤサがかなうわけもない。そこで私が介入し、この窮地から彼女を救い出す。ところが、問題は子どもらの誰もがこの‘レスリング遊び’を愉しんでいるようには見受けられなかったことだ。もはや面白がってはいない。むしろ男の子らは彼女に対して内なる熾烈な敵愾心だけが頭を擡げてくるといったふうなのである。ちょっと不可解に思われた。マヤサの‘陰気さ’が遊びに翳りをもたらすのか。何故か遊びの愉しさが損なわれてしまうのだ。マヤサの‘運のなさ(bad-luck)’がとても残念だ。

幾人かの男の子らが集い、‘列車’遊びをしていた。ビニールのストローやら輪などでこしらえた‘車輛’を幾つも連結した。それら‘車輛’はかなりの長さになった。一人の子がそれを床の上で引っぱった。他の子らがそれに続いた。皆、歓声をあげ、興奮して大騒ぎである。マヤサはこの遊びに加わっていたが、どちらかという邪魔立てしようとしている。‘車輛’を横合いから引っぱるやら。。自然、男の子らの中に彼女に対して怒りが湧き起こった。

[彼女の攻撃衝動が何に起因しているものやら。。もはや遊びにならない。陰湿で不気味な何かを感じ、すぐさま他の子らは反撥した。こうした‘列車遊び’には想像力が要る。そこには当然不慮の事態における‘脱線事故’をも想定しないはずもない。だから男の子らは真剣なのだ。そこに「水を差す」行為は、すなわち破壊的ということになる。万事が深刻なのだ。子どもらが互いにそれを知り抜いているとしたら、マヤサの行為が悪意を孕んだものとして牽制されるのは必至だ。そもそも‘列車’は良き象徴としての「父親ペニス」である。男の子らは今やそれを撰り込むことが至上命令なわけだから、マヤサの行為はそれへの羨望をとまなう攻撃と見做され、彼らにしてみれば断じて許しがたいということになるう。]

お迎えの時間が来て、今日はいつもマヤサの世話をしてくれてる若い女性(child-minder)が来てくれた(おそらくは住み込みのオペアだろうが)。ところが、マヤサは全然彼女の方を見ようもしない。明らかにいかなる接触をも拒んでいる。これは、彼女の母親が迎えに来たときに大喜びで抱きつくいつもの上機嫌な彼女とは随分と趣きが違う。感情の凍り付いたような、彼女の冷やかさには違和感を覚えたほどだ。

・1975/11/21・マヤサは、ぼんやりとして、万事控え目である。黙って突っ立っている。どうやらアニヤとジョーがぐるぐる回りして賑やかに遊んでいるのに興味を覚えたみたいだ。だが、自分の方から彼らに加

わる気配は見せない。私が彼女に歩み寄り、ハローと声を掛けた。だが、その瞬間、何ら言葉を発することもなく、ぷいっと歩み去った。[「一人でもわたし、平気よ」というところを示したかったのだろうか。]

マヤサはたまたまほぼ同じ年齢の男の子マシューと隣り合わせで座っていた。2人で一緒に何をしていたのかは知らないが、そこで何やらじゃれ合いが起きてしまう。<おまえのこと、叩きのめしてやるぞ>とマヤサが彼を脅している。これに対してマシューは、<ぼくの方がずうとおまえなんかより強いんだから..>と、自分がどんなに大きな男の子なのかを誇示してみせる。どうも感心しない！[せっかくの相手してもらえぬチャンスをみすみす逃している。マヤサのこの‘ボタンの掛け違い’が気になる。希求されているのは憧れの‘お兄ちゃん’だとしたら、つまりは男性性の創造力 (potency) なのだろう。ペニスへの羨望 envy がそれを邪魔しているとしたら、行き詰まりの袋小路 dead-end だ。とても残念！]

・1975/12/05..マヤサの母親が当番で来ていた。それでマヤサは上機嫌で、嬉しそうにしている。彼女は一人で机に座って何やら没頭している。花びらをそれぞれ穴にくっつけてお花を作っているのだ。それをし終えて、彼女は傍らの私からの言葉掛けに直接応えたわけではないが、<ええ、そうよ。私、もっとお花を作れるわ>と言って、この作業を続ける。彼女の顔は珍しく満足げである。[母親が身近に居てくれることが刺戟となったのだろうか、この場合のお花作りは彼女には珍しく女の子らしい遊びになっている。女の子であることも満更でもなさそう..。お花が‘孕む性’としての「女性性」やら「赤子」そのものを象徴しているとしたら、マヤサがそうした女性の創造力 (fertility) に希望を持てるといい。]

マヤサは、ルークとマシューが‘レスリング’の真似っこをしているのを見て、それに加わる。彼女に勝ち目は全然なさそうだ。負けても、悔しいとか惨めだとかの感情を露にする事は一切ない。どうも彼女が男の子らと一緒にどれほどレスリングを愉しんでいたかは疑問だ。マシューがマヤサに向かって、<おれの方がおまえよりも強いんだからな..>と言っている。相互に敵愾心を煽っている。「招かれざる客」ということでもなからうが、マヤサが他の子らと遊んでいて、仲良しの雰囲気にならないのは何故だろうか。

彼女の母親が私に語ったところでは、マヤサは男の子みたいなことが好きなんだそう..。彼女はスカートに絶対履きたがらない。それは上の姉とは対照的で、お姉ちゃんの方は女の子らしいヒラヒラの服装が大好きなんだそう..。母親はドイツでは教師であったとか。父親はアラブ人なんだとか。マヤサは来年の2月には5歳になるので「アメリカン・スクール」に入学予定と伺った。マヤサにどういう未来を考えているのかと母親に訊くことはどうも憚られた。それがいい選択だといいが..。

ミルク・サークルの時間、彼女は母親の側に座る。歌を歌う際には、とても積極的で、ハリエッタに歌う歌を率先してあれこれ所望するほどであった。このとき、彼女はなぜか妙にお気楽なお喋りムードで、つい調子に乗って、<子どもたちがうるさくて、私が何言っても聞えないぐらいよ>と言ったりする。まるで母親そっくりの‘教師’のつもりなのかしら？彼女はおやつ時間に皆にお盆の上のビスケットを配る役を拒んだ。どの子どもとてもそれをやりたがるのに..。シルポーに代わってもらうことにする。何故なら、

<彼はとても静かにしてる、いい子だから・・>と彼女は言う。ずうっとこの時間中、ちょっと狂躁ぎみ。時折声高に笑う。母親がマヤサの脇に大きな大人用の椅子に座っていたのだが、ダンとジェームズとの間にちょっとトラブルがあって彼女がその介入のため座を外したとき、マヤサはすばやく母親の椅子に乗って陣取った。しかし母親が戻ってくる気配を察すると、さっと急いで自分の子ども用の椅子へと戻った。結構はっこい！〔母親との関係は悪くなさそうだが・・。末っ子の甘ったれなところがあるのだろう。まだまだ母親を一人占めしたい気分は大いにありそうだ。その排他性が他の子どもらとの間に溝をつくっている。一方で大きな兄やら姉やらがいるから、結構マヤサは背伸びしている向きがある。教師の娘という自分をちょっと特別視してもいるようだ。賢さもある。それで事は余計厄介だ。他の子どもらとしくりこないはずだ。浮いてる。それで彼女が傷つくことがなくもなかりょうに、強気に侮蔑をもって彼らに応酬する。これが彼女の不人気の原因ともなっているのは間違いなかりょう。改めてマヤサの‘運のなさ (bad-luck)’ が惜まれる。〕

【補記】

マヤサの心に「死の棘」を感じる。それは‘罪’であり、ことばを変えれば‘驕り昂ぶり (arrogance)’ といったものであろう。それでいて、レンガの塀の上で降りられずにその恐怖に金縛りとなり、身動きならぬ彼女もいたわけだが・・。助けを求めることを潔しとしない、それがマヤサであった。もしかしたら、彼女の驕り昂ぶりは、傷つきやすく脆い自我の鎧としての「躁的防衛」なのかもしれない。心を震撼させる、内に秘めた恐怖 terror が察せられる。彼女の生い立ちの中に何か癒しがたい‘傷痕’がある。情け容赦のない暴力の臭いがする。例えば子どもらの‘列車遊び’だが、もしも彼女がそこで邪魔立てしなくてはならない理由があるとすれば、それは彼女の心的現実、つまり内側に見た‘惨禍’を反復せんとする衝動ではなかったか。つまり「脱線事故」といったような・・。彼女がドイツを離れたことがどういう家庭の事情か知らぬが、彼女にとって足元が崩れるような、自分の未来が突如として断たれたような剥奪感 deprivation を味わったといえなくもない。当然ながら‘列車’の中の(マヤサの心が抱える)人々の安否が危ぶまれる。問題は、マヤサの記憶の中でかつての人々の面影を辿ることができないということだろう。むしろ彼女の心の闇の中ではかつての同胞が‘死屍累々’と横たわる光景が刻まれていたのかも知れない。母親がドイツでは教師であったというから、母親が学校で教える子どもらすべてに彼女が敵愾心を向けていたというのも有り得る。ピオンのいうところの「繋がることへの攻撃性 attacks on Linking」が想起される。マヤサは誰とも繋がらない。そして繋がりが断たれた後も何も思い出すことはない。それは‘死’を意味する。プレイグループに彼女は7ヶ月間在籍した。そこで彼女は何ら懐かしむものを掴み得なかったらう。そして他の子どもらにしても、マヤサを懐かしむ者は誰もいない。

このままではどこへ行こうと、彼女は‘異邦人’のままだ。マヤサはいつになったら、誰かに<一緒だねえ！ I am with you！>を言えるんだらう。彼女の中の苛烈な‘悪夢’、どうも他の子どもらはそれを察知し、不安感を刺戟されるといった印象がある。そしてマヤサは避けられてしまう、そして逃げられてしまうのだ。こんなふうにマヤサには‘運の悪さ bad-luck’ がつきまとうのかな？ (2013/11/12 記)
